

丸山眞男の「思想史の思想史」

——「近代日本における思想史的方法の形成」を読む

宮村 治雄

丸山思想史の試みは、多様で多面的な広がりをもっている。そのなかで、ここで取り上げようとする論文（近代日本における思想史的方法の形成）一九六一）は、独自の位置にある。それは、丸山の「思想史方法論」でもなく（「思想史の考え方について」一九六一）、丸山における「思想史的方法の形成」過程（「思想史の方法を模索して」一九七八）の考察でもない。ここで、なぜ「思想史の思想史というやや奇矯な表現」でしかいいあらわせない問題を取り上げようとしたのか。また、また、それを通じて、いかなる問題を考察しようとしたのか。またそれは、どこまで果たされたのか。さらに、それは、丸山の「思想史方法論」や丸山における「思想史的方法の形成」とどのように関わっていたのかという問題を改めて考えさせることになる。

しかし、残念なことに、この論文は、未完のままに終わっている。

だが、丸山自身の周辺の文章からも、この論文のために雄大な構想の下に周到な準備作業がなされていたということ、また、それを必要とする内的な思想的要請が自覚されていたということが推測される。そうした事情を考慮しながら、この未完論文を、いわばその「可能態」において読むということが、この読書会の狙いである。

この論文執筆前後の考慮すべき丸山の「個人史」的文脈には、次のようなものがある。

その第一は、「政治学上の諸問題、とくに現状分析にまで手を広げていきた」それまでの研究スタイルから、丸山「本来の専門領域」とする「思想史」への復帰・集中事情がある。いわゆる「夜店」から「本店」への復帰といわれる変化である。丸山は、そこで改めて「アカデ

ミーの存在理由」を問い、また「学問」における「型」と「継承」の重視を強調することになる。

第二の事情は、その日本思想史研究上での方法・関心・視点の変化という問題である。そして、ここでは、変化の文脈は二重の意味を持っていた。

その第一は、方法における「発展段階論」から「文化接触」への重点移動ということである。そして、この関心の変化は、東大での「東洋政治思想史講義」での変化——一八五七・一九五八年度を境にした「開国」問題への新たな関心、いいかえれば、「閉じた社会」から「開かれた社会」への変化への着目として現れた。

「コトバの「翻訳」の問題をふくむ文化接触と文化変容という観点の思想史への導入は、普遍的な発展段階論の否定を伴わずにはいられない、ということです。その限りで、私は『日本政治思想史』が疑いもなく、まだその大きな網のなかにあった、マルクス主義的な歴史認識論との距離をさらに大きくしたといえます。同じく、歴史主義的な「展望」理論についていうならば、立場拘束性というときの「立場」は、まさに Standort としての Ort すなわち、空間的領域のほらむ思想史的な意義の問題に、嘗て私が考えていたよりもはるかに大きな比重を置くように再構成せねばならぬでしょう。」

〔思想史の方法を模索して〕二九七八、『集』一〇三三四三頁）丸山の自己分析は、「思想史の思想史」が、「専門領域」としての日

本思想史への復帰・集中を機に、丸山が「学問」の「作法」として改めて取り組んだ課題というだけでなく、そこにおける関心や視点の変化を自覚することによって、それまでであった先行研究との「批判と継承」の関係を改めて見直す必要に迫られた結果でもあるということを示唆している。とりわけ「空間的領域の孕む思想史的問題」への接近という視点は、改めて和辻の思想史との関係を再設定することを迫ることになる。

しかし、「思想史の思想史」への内的な要請が成立する文脈には、もう一つの問題が伏在していた。「自己批判」としての思想史から「可能性の探求」としての思想史への視点の移動が、それである。

「右のような論稿（超国家主義の論理と心理」を含む）がいずれも戦争体験をくぐり抜けた一人の日本人としての自己批判（略）を根本の動機としており、しかも三〇年代から四〇年代において何人の目にもあらわになった病理現象を、たんなる一時的な逸脱ないしは例外事態として過去に葬り去ろうとする動向にたいする強い抵抗感の下に執筆されたために、そうした病理現象の構造的要因を思想史的観点からつきとめることにおのずからアクセントがおかれた」（『日本の思想』あとがき）一九六一、『集』九一一一三四頁）

「私自身としてはこうして現在からして日本の思想的過去の構造化を試みたことで、はじめて従来より「身軽」になり、これまでいわば背中にズルズルとひきずっていた「伝統」を

前に引き据えて、将来に向かつての可能性をそのなかから「自由」に探って行ける地点に立ったように思われた。」（『日本の思想』あとがき 一九六一、『集』九一一―四〇五頁）

注意すべきは、こうした変化が、「伝統」へのスタンスにおいて改めの考察を迫られていくことになったということである。丸山は、こうした関心を強めるなかで、これまでのさまざまな「伝統」再評価の試みへの批判——戦前戦後を通じた「伝統賛美」だけではなく、戦後の「歴史と民族の発見」（石母田正）のようないわゆる「進歩派」の側の「伝統再評価」をも含めた——を前面に出していく。と同時に、「超国家主義の論理と心理」で解剖したような日本社会の病理に対する批判の必然性と必要性を依然として主張しつづけた。

「本論文の「抽象」が一面的だという批判は甘んじて受けられるけれども、他方ここで挙げたような天皇制的精神構造の病理が「非常時」の狂乱のもたらした例外現象にすぎないという見解（たとえば津田左右吉博士によって典型的に主張されている）に対しては、当時も現在でも到底賛成できない。」（『現代政治の思想と行動』「超国家主義の論理と心理」への「追記」 一九五六）

こうして丸山は、「伝統」の再評価が、「天皇制的精神構造の病理」批判と改めてどのように相互関連を与えられるのかという新たな問題に直面する。この論文の「ヤマ」となるのが、津田左右吉論、という予定だったという丸山の回想——「ある日の津田博士と私」は、ここで

も丸山の思想史の新たな出発が、「思想史の思想史」に向かわせる経緯を示唆しているだろう。

和辻哲郎と津田左右吉という二人の思想史的方法の成立過程についての思想史的考察を軸とするこの論文の準備経緯は、ほぼこうしたものとしてみることができよう。

では、この論文での考察を通じて丸山は、どのような新たな思想史的方法の重要性を発見していったか。これは、より周到な考察を必要とする問題であり、この論文を「可能態において読む」こと全体に関わるが、当面、一つだけ指摘しておくならば、丸山は、「可能性の思想史」という問題を考えるためには、福沢にまで遡及しなければならぬと考えていたということである。丸山は、この論文で「日本の自己認識としての日本思想史の辿った道程」（九四頁）を、その「端初」としての「啓蒙史学」（丸山はそれを「文明史的思想史」と規定している）にまで遡る理由を次のように説明している。

「ぼくは、明治以後の日本の思想史研究の過程をもういっぺんここで振り返ってみると、それぞれの段階で、これからの思想史学というものを豊かにしていく上において、汲むべき遺産があるような気がするんですよ。」（『思想の冒険』一九五九、『座談』三二―三四頁）

そうして「可能性の思想史」の端緒に位置づけられていたのは、福沢における「観念の冒険」の試みであった。丸山は、すなわち、「自己批判」を媒介にした「可能性の探求」という新たな思想史の課題を、

まさに「日本の自己認識としての日本思想史学」の「形成」と「道程」を辿ることで果たそうとしたのである。以下、テキストをできるだけ丁寧に読むことにしよう。

丸山眞男の思想史の思想史

講師：宮村治雄氏（成蹊大学教授）

ねらい：日本における「思想史の思想史」を試みた本論文は、ユニークな視点からの近代日本思想史でもあり、丸山自身の思想史のもつ思想史の意味を考えるためにも示唆的な作品である。未完に終わったが、全体像への手ごかりは示唆されており、周辺の資料を補いながら、丸山の企図をできるかぎり追跡し、その含意をも含めて読解することで、丸山思想史の思想史的位置と意義を考えてみたい。

テキスト：丸山眞男「近代日本における思想史的方法の形成」（南原繁先生古希記念『政治思想における西洋と日本 下』1961、東京大学出版会、後に『丸山眞男集』第九巻所収。）

日 程：第1回：2006年3月22日（水） 午後2時～3時30分
第2回：2006年4月19日（水） 午後2時～3時30分
第3回：2006年5月17日（水） 午後2時～3時30分

場 所：51号館1階・51101室

参加費：無料（テキストのコピーは主催者が用意します）

人 数：30人以内（申込み先着順・参加申込は参加申込票を郵送またはFAXでお送り下さい）

申込先：〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1 東京女子大学 教育研究支援課
TEL: 03-5382-6454 / 月～金・9時～17時（11:25～12:25を除く）
FAX: 03-3301-0473

* 下記にご記入いただいた個人情報は、読書会の運営及び当センターの行事案内にのみ利用いたします。

-----キリトリ-----

参加申込票

丸山眞男記念比較思想研究センター読書会「丸山眞男の思想史の思想史」に参加の申し込みをします。

ご氏名 _____

住 所(〒 _____) _____

電 話 _____